

# 日刊 動労千葉

87. 6. 27  
No. 2587

国鉄千葉動力車労働組合  
千葉市要町二一八（動力車会館）  
（鉄電）二九三五（六）（公衆）〇四七二（二二）七二〇七

# またもや26名に配転の事前通知

## 当局の攻撃を打ち破り、動労千葉勢力の拡大がちとろう

### 各支部は集会、オルグを展開し 反撃体制を構築しよう！

六月二二日、千葉運行部は、営業への強制配転の第三弾として二六名への事前通知を強行した。なんとか運転から追い出し、屈服させようというのだ。しかし、当局の目論見とは裏腹に、配転された組合員たちは怒りを燃やして不屈に闘いぬき、当局の狙いを粉碎している。怒りをさらに燃えさせたせ、反撃へ転じよう！

二六名中二三名が動労千葉

この間当局は「営業の欠員を運転の過員から補充する」として、五月八日、六月一日と二回にわたって強制配転を行ってきたが、六月二二日、またもや許すことのできない強制配転の事前通知を二六名に対して行ってきた。

- 内容は次の通りである。
- 銚子運転区 12名  
動労千葉 9名 国労 1名  
鉄産労 2名
  - 勝浦運転区 14名（全員動労千葉）

### 営業で「勢力」が拡大

今回の強制配転は、配置が千葉以東の主要駅で、「夏季輸送」の内容を含んだものになっているが、実際には動労千葉破壊が唯一の目的である。さらに許せないのは、一度旅行センターに配転した組合員を「タイ回し」的にまたもや駅に配転しているのだ。

しかし、この間二回の配転者を含めて動労千葉組合員の総数が六三名となつてきているとおり、当局の当初の狙いが配転させられた組合員一人ひとりの怒りによって完全に粉碎されてきており、営業でのひとつの「勢力」を築きあげてきている。動労千葉の闘いの正しさ、労働者らしさをさらに発揮して頑張りぬくならば、必ず勝利できることは確かである。屈服は奴隷への道なのだ。

動労革マルー鉄道労連を見ればそれは明らかだ。いくら屈服し、当局に忠誠を誓おうが敵の攻撃は続き、最後にはボロ雑巾のように捨てられてしまうのだ。つまり、闘わなければ労働者の勝利はないということだ。運転・営業を貫く闘いで反撃し、勝利しようではありませんか。

### 勝浦支部、職集開催

#### 「配転された仲間思い共有し、反撃へ」

五月二五日、勝浦支部は、営業に配転となる組合員を集め意志統一をはかった。その中で「なんとんでも反撃し、運転への復帰を一日も早くかちとる」などの意見が出され、当局の攻撃に屈しないことが明らかにされた。

そして、班編成と役員選出を行い、全体の意志統一をかちとった。

また、支部に残る組合員についても集会を開き、「営業へ配転になった仲間達の思いを共有する」「職場での闘いを創りあげていく」などを確認した。そして、二五日以降、臨時委員会に向けて、スト権の問題や夏季手当の差別支払いに対する対処についての個別オルグを展開し、いよいよ反撃にうつって出ることを確認した。

各支部も集会、オルグを展開し、反撃体制を築きあげよう。

# 7.5 国鉄地引会 綱大会へ

九十九里